

ムラサキクラゲ



名前と違い褐色個体が多いムラサキクラゲ (Tokioa & Nishimura, 1970 改写、モノクロに着色)

久保田 信

62



ムラサキクラゲは鉢クラゲ類の仲間と比較的大型になる種である。日本全体からの記録はそれほど多くなく、田辺湾の周辺からは、過去に1度だけ、1969年11月中旬に沖合で1個体が採取されている。その時の詳細な記録が当

時瀬戸臨海実験所の時岡隆先生と西村三郎先生によって英文で記録されている。本種の傘径は通常10センチ前後だが、田辺湾沖の個体はとりわけ大きく26センチもあった。体色は名前と違って褐色だった。本種はむしろ紫色より褐色の方が多いと言われるが、このことは今後確かめる必要がある。傘の表面全体に小さなつぶつぶがたくさんあって、縁に行くほど小さくなっている。また、これらはメッシュ状になっている。下半部にある特徴的な口腕は8本あり、いずれも非常に長く伸びている。この口腕に

は細かい穴が無数空いてあり、微小なプランクトンを吸い込んで食べるが、大きなものだと食べられない。このような体のつくりはタコクラゲに類似しており、両者は同じ仲間とされる。タコクラゲと同様に、ムラサキクラゲもわが国では黒潮海域で記録されている。おそらく外洋性で、ポリプ世代もあるのだろうが、いまだ不明で、本種はどこが原産なのか分かっていない。大型の体であるのと関連して、中央にある十字形の胃袋から出ている消化循環系は、たいへん複雑になっている。そのような管系は、傘の縁へ行けば行くほど緻密な目の細かい網状になっているが、栄養を体全体に送るにはこうした形状が効率的である。傘の縁は複雑に刻まれるが、8個の感覚器が規則的にある。写真の個体は雌で生殖巣が4個あり、いずれも馬てい形をしている。おのおのが複雑に折り畳まれていて、中には0.35ミリの卵が形成されている。(京都大学准教授)